

02	一宮	西成東小学校	ヨシダ リュウノスケ
			名前 吉田 隆之介
分科会番号	20	分科会名	総合学習

1 研修主題

「子どもが生き生きと活動する総合的な学習の時間の展開」
～体験活動や出張授業を通した福祉教育・キャリア教育～

2 研究のねらい

本校では昨年度、『主体的に取り組む、共に学び合う東っ子の育成』—個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実をめざして—を現職教育のテーマとし、学校全体として総合的な学習に取り組んだ。その中でも特に5年生では、「福祉実践教室」において事前授業や事後授業までを通して、「ふくし」について学んだ。さらに、「福祉実践教室」や「福祉イベント」の体験活動を行うことで、得た知識を確かなものにする福祉教育に取り組んだ。また6年生では、バスケットボールチーム、名古屋ファイティングイーグルス主催の「夢授業」や制服について学ぶ「衣塾」、ランドセルのつくり方について学ぶ「カバン工房」などの出張授業を通したキャリア教育に取り組んだ。

本実践では、上記で述べた活動が児童にどのような影響を与えたのか、児童の感想やまとめ新聞をもとに考察していく。

3 目指す児童像

「社会や人と関わり合いながら、自らのよさや夢を見つけ、生き生きと活動する児童」

4 研究の仮説

仮説1 机上だけでも体験活動だけでも終わらせず、事前学習による知識の獲得と、事後学習による振り返り・発信（まとめ新聞づくり）のサイクルを確立することで、児童は福祉を自分ごととして捉え、共生社会の担い手として助け合う心を高めることができるであろう。

仮説2 社会の第一線で活躍するプロフェッショナルの生き方や仕事への誇りに触れる出張授業を設定することで、児童は自分の将来や生き方、夢に対する関心を高め、日々の学習や生活に対する主体的な意欲を向上させることができるであろう。

5 活動概要・計画

(1) 活動概要

【5年生：福祉教育について】

① 事前学習

- ・スクールソーシャルワーカーによる「ふ・く・し」とはなにかを考え、知識を得るための事前授業。
- ・インターネットや本を用いた福祉・バリアフリーに関する調べ学習。
- ・日常生活の中に潜む課題や、自分たちの周りにある工夫（点字、スロープなど）への気づき。

② 体験活動

- ・福祉実践教室の実施。
- ・社会福祉協議会や日本福祉大学の学生が主催の福祉イベントの実施。

③ 事後学習

- ・体験を通じて気づいたことや気持ちの変化を振り返る事後授業の実施。
- ・学んだ内容や自分の考えを広く発信するためのまとめ新聞の作成。

【6年生：キャリア教育について】

① カバン工房

- ・6年間使い続けているランドセルの製造工程や職人のこだわりを学ぶ出張授業。
- ・一つの製品が完成するまでにどれほど多くの人の手と想いが関わっているかを知り、感謝と物への愛着を育む。

② 夢授業

- ・プロバスケットボールチーム、名古屋ファイティングイーグルスの選手・スタッフを招いた出張授業。
- ・プロの技術を体感するとともに、夢を叶えるまでの努力や挫折の乗り越え方についての講話を聞く。

③ 衣塾

- ・毎日着用する制服や衣服の歴史・役割について専門家から学ぶ出張授業。
- ・TPO(時・場所・場合)に応じた装いや、衣服が他者に与える印象についての理解を深める。

(2) 活動計画

	6月	9月	10月	11月	1月	2月
5年		福祉事前学習	福祉実践教室	福祉イベント		福祉事後学習
6年	カバン工房				夢授業	衣塾

6 研究の実践

【5年生福祉教育について】

① 事前学習

福祉実践教室や福祉イベントを迎えるにあたり、まずは「ふくし」とはなにか、スクールソーシャルワーカーの話を聞いた。「ふくし」とは「ふだんの・くらしの・しあわせ」という意味で、障害のある人たちだけの言葉ではなく、自分たちにも関係するということを意識づけた。この事前学習によって、外部講師の話を聴く姿勢や、体験に対する目的意識が大きく向上した。



事前学習を受けている様子

② 体験活動

・福祉実践教室

事前学習によって得た知識を福祉実践教室での体験で確かめた。実施した種目は車いす体験、高齢者疑似体験、点字体験、認知症理解である。事前に児童に興味のあるものをアンケートで聞き、4つから2つを選択させた。体験中は「車いすってこんなに難しいんだ」「点字を速く打てない」など、体験しないと実感できない思いが多く聞こえてきた。さらに実際に車いすを利用されている当事者の方から、普段の生活の中で直面する困りごとや社会的な障壁について直接お話を伺う機会を設けた。児童は、疑問に思ったことをその場で質問し、生の声を通して現状を理解することができた。教科書やインターネットだけでは得られない生の言葉に触れたことは、児童が福祉を自分ごととして捉えるために、有意義で価値のある時間となった。



車いす体験



高齢者疑似体験



点字体験



認知症理解

・福祉イベント

福祉イベントは自分自身が大切な存在であることを実感できる、自分自身と周りの人を大切にできる、誰のしあわせも共に考え合うことができるということを目的に行われた。これらの目的を具現化し、子どもたちが「ふくし」を身近に実感できるよう、学校・大学・地域が一体となった体験行事を企画・実施した。この行事は、日本福祉大学の学生や一宮市のスクールソーシャルワーカー、一宮市社会福祉協議会の方々との協働によって実現したものである。当日、児童は多様な人々と触れ合いながら、以下の7つの体験種目に挑戦し、体験を通して多様な生き方や共生社会のあり方について学んだ。

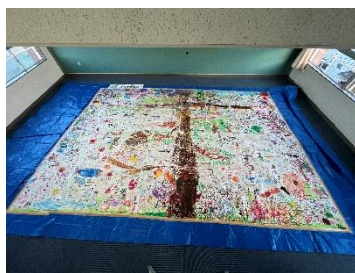
実施した7つの体験種目の内容とねらい

種目名	内容とねらい
㊦ 大きな絵体験	周囲と協力しながら一つの大きな絵を完成させる。他者と協調し、表現し合う喜びを通じて、多様な自己表現の方法を学ぶ。
㊧ 地域の宝発見	自分たちが暮らす地域の中に潜む自分の好きな場所の再発見をする体験。自分たちの地域には多くの素敵な場所があることを見つけることで、地域と繋がっていることを実感させる。
㊨ 点字体験	点字の仕組みを学び、実際に点字器を用いて文字を打つ体験をする。視覚に頼らないコミュニケーション技術に触れ、当事者の生活の工夫や知恵を実感する。

㊦ 手話体験	日常的な挨拶や簡単な自己紹介を手話で表現する。言葉以外の多様な意思伝達方法を学び、互いの想いを伝えることで対話的な姿勢を育む。
㊧ アダプテッドスポーツ	年齢や障がいの有無に関わらず、すべての人が一緒に楽しめるようルールや用具を工夫したスポーツに挑戦する。「誰もが参加できる工夫」の重要性を、身体を動かしながら体験的に理解する。
㊨ ユニバーサルデザイン探し	普段生活している学校の中から、全員にとって使いやすくデザインされたものを探し出す。デザインが持つ「すべての人に優しい」という思想に触れ、多角的な視野を養う。
㊩ ボッチャ	パラリンピックの正式種目であるボッチャにクラスメイトとチームを組んで取り組む。一投ごとに声を掛け合い、作戦を練るプロセスを通して、お互いを認め合い、一丸となって目標に向かう協働性を育む。



大きな絵体験



大きな絵体験（完成版）



地域の宝発見（完成版）



点字体験



手話体験



アダプテッドスポーツ



ユニバーサルデザイン探し



ボッチャ

③ 事後学習

事後学習では、事前学習で得た知識と、福祉実践教室や福祉イベントでの体験活動を通して得た実感を結びつける活動を行った。具体的には、児童にとって身近な実際の道路の写真を提示し、どこに「ふくし」が隠れているかを考えさせた。これにより、頭の中の知識と体感を日常生活のリアルな風景に重ね合わせ、それまで見過ごしていた街の工夫を自分ごととして捉え直すことができた。

【6年生:キャリア教育について】

①カバン工房

毎日使っているランドセルが、職人の手作業によってどのように組み上げられているかを映像や実物を通して学んだ。児童からは「6年間大きな壊れもなく使えているのは、職人さんが一針一針頑丈に縫ってくれていたからだと分かった」といった驚きと感謝の声が上がった。ものづくりの背景にある人々の熱意や努力を知ること、物を大切にする心を育むキャリア教育となった。



革製品を作っている様子

②夢授業

プロバスケットボールチーム、名古屋ファイティングイーグルスの選手やスタッフを講師として招いて、夢について講話をしていただいた。まずは、プロアスリートの磨き抜かれた技を間近で見たり、試合をした。児童からは「シュートがほとんど入る」や「パスが速い」など驚きの声が上がった。実技体験の後には、夢をテーマにした貴重な講話をしていただいた。



実技体験の様子



夢授業の様子

講師からは、プロの選手になるまでに経験した努力や挫折、幼少期にプロの道を目指したきっかけ、そして夢を叶えてプロの選手になってからも続く競争などの厳しさについて、語っていただいた。活躍の裏にある努力や厳しさに触れたことで、目標に向かって努力し続けることの大切さを学び、自分のこれからの生き方を見つめ直す貴重な時間となった。

③衣塾

児童にとって来年から着ることになる制服に焦点を当てた。衣服には身体を守るだけでなく、「社会的なアイデンティティを示す」「周囲への敬意を表す」という重要な役割があることを学んだ。児童は、自分たちの着ている制服が多くの工夫やデザインによって作られていることを知り、身だしなみを整えることが自己管理能力や社会性につながることを理解した。これは、中学校進学を控えた時期に有意義な機会となった。



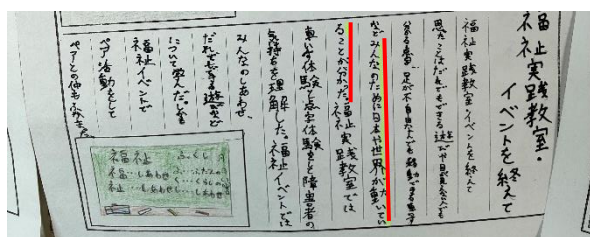
講話を聞いている様子

7 児童の感想・まとめ新聞に基づく考察

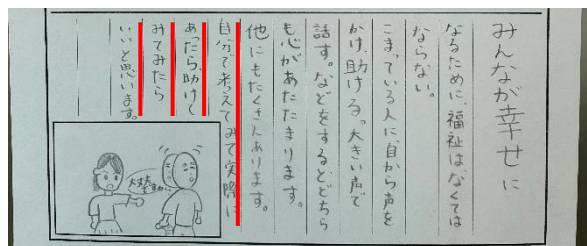
本実践が児童に与えた変容について、児童の成果物や記述から以下のように考察する。

(1) 福祉教育における変容の考察

児童の感想文やまとめ新聞の記述を分析すると、事前学習時の「障がいがある人は大変そうだから手伝わなければならない」という受動的な態度から、「私たちの暮らす街にはまだまだ障壁がある。誰もが暮らしやすい社会にするために、まずは自分が進んで声をかけられる人になりたい」という当事者意識の芽生えと主体的な行動につながる意欲へと変容していることが読み取れた。事前・事後授業を丁寧に位置づけたことにより、一時的な体験活動で終わらず、自分ごととして考える思考力が養われたと考察できる。



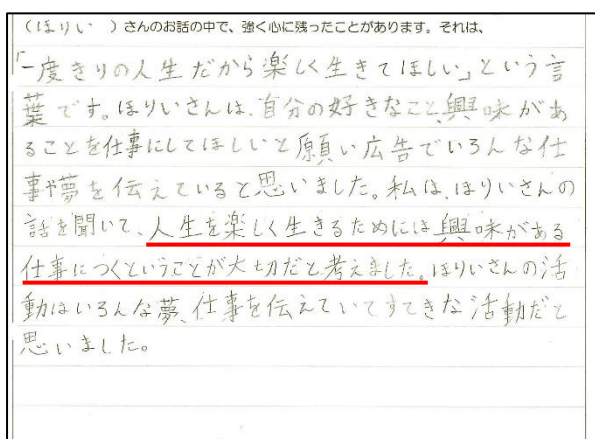
福祉まとめ新聞Ⅰ



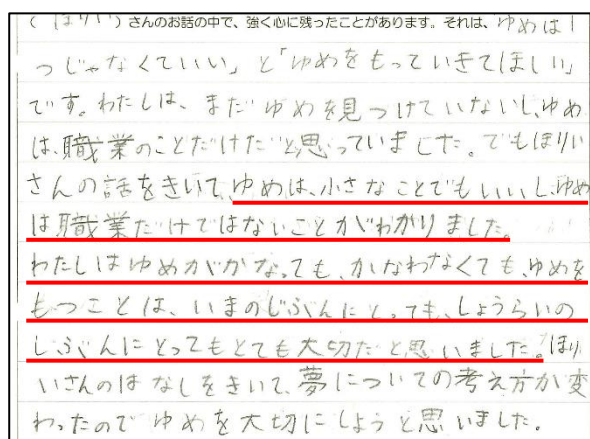
福祉まとめ新聞Ⅱ

(2) キャリア教育における変容と考察

3つの出張授業は、児童一人ひとりがこれからの人生における自分自身の夢について考えた実りあるキャリア教育の実践となった。感想文の中には、「夢は決して一つに絞る必要はなく、今はまだ見つからないなくても焦る必要はない」ということや「夢とは単なる具体的な職業を指すのではなく、自分がどうありたいかという『生き方』そのものである」といった記述が見られた。これからの人生を豊かに、そして楽しく歩いていくためには、自分の好きなことや興味のあることを大切に、それを仕事や自らの生き方に結びつけていく主体的な姿勢が重要であると実感したようである。出張授業を実施したことで、将来就きたい仕事という狭い意味での職業選択だけでなく、「働くとはどういうことか」「夢とはなにか」という、より多様な考え方が見られるようになり児童の職業観が広がった。



キャリア教育の感想Ⅰ



キャリア教育の感想Ⅱ

8 今後の課題

【5年生：福祉教育の課題】

福祉やキャリアに対する意識は高まったものの、それを学校生活などで日常的に実践する場がまだ不足している。今後は、児童が主体となって学校内のバリアフリー改善案を提案するなど、より一歩踏み込んだ実践を目指したい。

【6年生：キャリア教育の課題】

今回は他教科と関連付けて学習を進めることができなかったが、今後は国語や社会、理科、算数など他教科の単元との結びつきをより強化し、総合的な学習の時間を中心とした学校全体のカリキュラム・マネジメントを洗練させていく必要がある。